Nagoya J. Health, Physical Fitness, Sports Vol.46, No.1 (May 2023)
DOI: 10.18999/njhpfs.46.1.33

親の養育態度が子の社会人生活に及ぼす影響
―仕事に影響する毒親から受けた心の傷―

Influence of parenting attitudes given in childhood on the life attitudes of working people:
Psychological trauma received from a toxic parent affects working life

金　森　史　枝*　　蛭　田　秀　一**

Nobue KANAMORI*　　Shuichi HIRUTA**

Abstract

The purpose of this study is to examine relationship between current life attitudes of working people (N=1824) and parenting attitudes given in childhood. The results of a survey analysis suggested, first of all, that a certain degree of meddling in childhood from parents would help a child live an easier future working life while meddling beyond a certain limit would intensify the difficulty of his/her working life. The results also implied that, for parents, including as those who are verbally abusive or meddling or those who prioritize public image and vanity, who are generally exemplified as a type of "toxic parents," not all of their words and behaviors would constitute toxic parent requirements but the exact opposite effects were given to their children depending on whether or not a certain threshold has been exceeded. Next, a logistic regression analysis was conducted, classifying parental attitudes into four categories according to the degree of [affection/support] and [intervention/interference] from the parent as perceived by the child. The results showed that, in the group with [Stronger sense of being loved/supported] and [Weaker sense of being intervened/interfered], the children showed positive results on almost all items including human relationship building and career development. Conversely, in the group with [Weaker sense of being loved/supported] and [Stronger sense of being intervened/interfered], the workers showed negative results. The children showed positive results in the order of parenting attitudes as follows: More Affectionate and Less Interventional > More Affectionate and More Interventional > Less Affectionate and Less Interventional > Less Affectionate and More Interventional. In other words, the overall trends of the odds ratios indicated that the positive results were obtained from parenting attitude in the order of: Watchful > Overprotective > Indifferent > Ruthless. It was implied that the closer the parental attitude was to ruthless., the more negative the child's working life was in general. The above shows that the life attitude of working people is related, in part, to the parenting attitudes given in childhood. Workplaces may need to take some measures to deal with employees who are experiencing difficulties in life or mental problems due to inappropriate attitudes of their parents.

Ⅰ　緒言

親の過干渉など家族に何らかの問題のある家庭で生育した場合、社会人生活において生き辛さを感じる人の割合が多い。金森・蛭田（2022）では、俗にいう毒になる親や家族に悩まされた者について、そうでない者を基準として比較した結果、家族問題が職業生活全般にネガティブに作用する傾向にあることを明らかにした。特に、「生き辛さを感じることがある」では0.1％水準で4.594という非常に高いオッズ比を示した。また、「心を許せる友人や知人があまりいない」「職場の上司に恵まれていない」などでも高水準の有意なオッズ比を示した

＊　名古屋大学総合保健体育科学センター共同研究者
＊＊　名古屋大学総合保健体育科学センター教授
＊　Research Center of Health, Physical Fitness and Sports, Nagoya University
＊＊　Research Center of Health, Physical Fitness and Sports, Nagoya University

ことから、人間関係の構築と家族問題との間にも相対的に強い関連性が示唆された。

河合（1980）が、「親子関係についてみると、これは運命的に決定づけられていることが、最も重要な点であると思われる、そこには選択ということが存在しない」と述べているとおり、子は親を選ぶことができず、親も子を選べない。親を選ぶことができず家庭環境次第で人生が左右されることを「親ガチャ」という。ガチャとはお金を入れてハンドルを回すとランダムにカプセルが出てくる自動販売機のことである。カプセルから何が出てくるかわからないことから、親を選べず生まれた家庭環境次第で人生が左右されるかの如く捉える言葉として近年、使われるようになった。なぜ今さら「親ガチャ」という言葉が流行語になるのか。そこからは、現代社会における親子関係がこれまでとは異なる様相を呈し始めていることが垣間見える。それは現代社会で自分の能力に見合った仕事に就き平穏な家庭生活を維持することが、これまで以上に困難を伴うようになっている証左かもしれない。そうだとしても自分の人生の不運を親のせいにすることは、自分の人生を生きているとはいえない。現実が不運だと感じざるを得ない状況にあれば、それを何とか克服し自らの人生を意義あるものにしていくことが大切となる。過去に何があろうとも、そして、そこから脱却するには時間がかかるかもしれないが、不運だったからこそ自己の人生に光や生き甲斐を見出し、逆境を糧にしてレジリエンス（精神的な回復力）に換えて自分らしい人生を彩っていくこともできる。しかし、学校や就職で躓き、自分の能力に見合った望む仕事に就けず、不本意な状態から抜け出ることがどうしてもできないという現実があるのも確かである。そこには、人間関係がうまく構築できない、生き辛いという理由でメンタルヘルス不調を覚える人も増えており（岡崎・金森、2021）、自助努力のみでの現状打破はなかなか困難な状況にあることも否めない。

かつては「親次第で人生が決まる」といえば、親の社会的地位や経済力に着目されることが多かった。しかし、現在は必ずしもそうではない。金森・蛭田（2022）では、俗にいう「毒になる親」に代表される親の偏った養育態度によって、心が傷つき生き辛さを抱えて生きている社会人が一定割合で存在していることを明らかにした。すなわち、親に求めるものは経済力もさる事ながら、むしろ自己の抱える漠然とした生き辛さの解放であるかもしれない。それは外形的物質的な充足よりも、むしろ内面的精神的な充実への希求なのかもしれない。それほどまでに親の養育態度が原因の一つとして考えられる子どもの蝕まれた心の傷は、社会人となった後でも順調なキャリア形成を実現する上での阻害要因となる。親からの不適切な言動は、本人の気が付かないうちに「心」「潜在意識」という可視化できない繊細なものにじわじわと毒を盛られたが如く浸潤し、得体のしれない不安や生き辛さというものを惹起させる。それは頑張って前向きに生きていこうとする原動力すら奪うことがある。それゆえに親子関係において不適切な養育態度を有する親の一部を、俗に「毒になる親」と呼ぶ所以である。

一方で、子どものために良かれと思って子育てをしてきた親からすれば、毒扱いされてはさぞかし心外であろう。親といえどもは完全な人間など存在せず、その親自身もまた自身の親とは愛着に問題を抱えて生育した可能性もある（e.g., 愛着の世代間伝達：遠藤, 1992）。清水（2005）が、「家族もストレス緩和の場であるとともにストレス発生の場である、複層的な生活世界」と述べるとおり、家族は複雑で多義的なリスクを多分に孕んでいるのである。

なお、本稿で用いる「心の傷」という言葉は、親との愛着形成がうまく獲得できず、また、親の価値観に翻弄され、知らず知らずのうちに自分を否定し、社会への適応や他者との円滑な関係性構築が困難となり生き辛さを覚える状態にあるという意味で用いる。

Ⅱ　先行研究と研究目的

（1）俗にいう「毒になる親」と生き辛さ

労働者の業務上の負傷、疾病、障害又は死亡という業務災害は、「業務遂行性」や「業務起因性」などの労災認定基準が適用される。従って職場での精神的な疾病は長時間労働などの労働条件や職場環境、そして、心理的負荷の強度という点から評価されるため、職場における疾病は個人の気質的なことはあまり問題にされない。一方で、職場内には外見的には普通に仕事をしているが、内面では生き辛さを抱えて過ごしている人たちは多く存在している。メンタルヘルス不調の要因は業務上の課題だけではない多様な要因と絡み合っており、とりわけ、家族問題など様々な潜在的要因があることは現場の臨床で確認されている（岡崎・金森、2021）。また、メンタルヘルス不調までには至らないが、生き辛さを抱えている人は数多く潜在している。

金森･蛭田（2022）では、まず、Susan Forward（1989）の『毒になる親（Toxic Parents）』から「毒になる親」を「子どもの人生を支配して子どもに害悪を及ぼす親」と定義して先行研究の検討を行った。その特徴の一例では片田（2019）の「子どもを攻撃する親」として、子どもを支配しようとする親、子どもの領域を平気で侵害する親、子どもの気持ちより世間体や見栄を優先する

親、子どもを罵倒する親などを例示した。また、小川（1994）の「子供に対して養護的特徴に欠け、かつ過保護、過干渉的統制傾向が強いという親の養育態度が不安神経症の発症に重要な役割を果たしていると結論できると思われる」という研究結果に着目した。さらに、友田（2016、2017）の親のマルトリートメント（子どもへの不適切なかかわり方）が子どもの脳を物理的に傷つけ、それがうつや統合失調症などの病を引き起こす原因にもなることを示し、親に過干渉やコントロールされたこと等で成人してもメンタルヘルス不調として発現することを確認した。

次に、社会人に対するアンケート調査を実施し、「家族問題に悩まされているか否か」について尋ね、また、現在職場の人間関係が良好に構築できているか、生き辛さを感じることがあるか、職場の上司に恵まれているかなどの15項目からなる「仕事全般及び自己に関すること」について尋ねた。その結果、毒母、毒家族、毒母かつ毒家族を含めたいわゆる機能不全家族の経験を有する割合は、男性36.9％、女性40.8％と女性がわずかに多いだけで、社会人にとっての毒親問題は男女の区別なく起きており、大卒正規雇用者では概算で約４割の者が家族問題の影響を何らか受けていることが明らかとなった。また、「仕事全般及び自己に関すること」についてのロジスティック回帰分析からは、毒母や毒家族の家族問題を抱えた経験がある場合、基準群（家族問題なし）と比較して仕事や本人に関するほぼすべての項目で有意なオッズ比が示され、総じて家族問題が職業生活に対しネガティブに影響していることが示唆された。さらに、毒母、毒家族、毒母かつ毒家族の全てで0.1％水準の高いオッズが示されたのが、「生き辛さを感じることがある」及び「一般的な社会常識が不足している」の２項目であった。

以上から、たしかに「毒になる親」や「機能不全家族」の経験者は社会人生活において生き辛さを感じる傾向にありネガティブな状態にあるということは確認できた。しかし、とりわけ「毒になる親」については臨床現場等からの当事者本人の論述が中心であるため、学術研究として多角的に研究することが必要である。このため、本研究では社会人を対象に親の養育態度が社会人生活に及ぼす影響について分析する。

（２）親の養育態度と愛着理論

本稿では、「養育態度」を「親の子に対する態度」[1]と定義する。親などの養育者（以下、「親」という）の養育態度が子どもに及ぼす影響について、主に幼児から青年期頃までの発達に関する先行研究がいくつかある。まず、養育態度の考え方として、中道（2013）はBaumrind（1967、1971）の養育態度の分類について、子どもの意図をできる限り充足させようとする側面である応答性（responsiveness）と、母親が子どもにとって良いと思う行動を決定し、それを強制する側面である統制（demandingness）の二軸の高低により、養育態度を権威的（authoritative）、権威主義的（authoritarian）、許容的（permissive）の３つに分類されることを紹介している。さらに、この３分類に「放任的」を加えた４つの養育態度の分類（浅野ら、2019）もなされている。

次に、対人関係のあり方に影響を与えるとされるBowlby（1969、1973、1980）の「内的作業モデル」（Internal Working Model: IWM）理論について触れる。内的作業モデルは、個人特有の対人関係を判断する枠組みとされ、あらゆる対人関係での出来事を解釈し処理する手助けする（作業する）ものと定義されている（酒井、2001）。これは「乳幼児期にどのような母親（もしくは主な養育者）に育てられたか、その親子関係の良し悪しが子どものその後の人生を大きく決定づけるという理論」（高橋、2022）である。子は親に守られ安心を得るという親との愛着形成を通して他者との基本的信頼を獲得し、心の平安を体験しながら次第に他者との関係性を体得していく。しかし、この親との愛着形成がうまくできないと愛着が否認されて心は傷を負っていく。島（2014）は大学生を対象とした調査から、親の養育態度が過保護であると認知しているほど不安が高く、ケアを受けたという認知が低いほど回避が高くなっていることを明らかにした。そして、「このケアの低さは親との関係の中で愛情や温かさを十分に感じられていないことを意味しており、親からケアを受けていないという認知は、親密な関係の中で安寧が得られないことにつながり、親密な関係を回避する傾向につながった」と考察されている。島の研究では、親からケアを受けた認知が内的作業モデルの認知に、親が過保護であったという認知が内的作業モデルの個人的・対人的適応に影響するというモデルが成立することが示されている。

さらに、笹川ら（1992）は、各発達時期における父親・母親の賞賛・叱責による養育態度と性別による自己効力感と自己統制感の関係を調べた。そして、小学校と高校の時期に両親によく褒められた男子学生は自己効力感が高く、小学校高学年の時期に母親によくしかられた女子学生は低いこと。また、高校の時期に両親によくほめられた男子学生は内的統制感が強く、小学校低学年に父親に叱られた女子学生の内的統制感は低いことを明らかにしている。

また、山下ら（2010）は、子ども時代の両親の養育態度と大学生の現在の親子関係の関連を分析している。両親ともに子どもの頃の養育態度が「情愛と過保護」「情

愛と自律承認」タイプと「冷淡と干渉」「無関心」タイプの間に現在の親子関係の差異がみられ、現在の親子関係は過保護や過干渉の軸は関係なく、愛情・共感の軸だけが関係していた。このことから現在（大学生）の親子関係の良好さは親の暖かさや共感、親密さなどの愛情の程度の方がより重要であり、子どもの頃に過保護であったと感じていることは現在の親子関係にあまり影響されないと思われるとしている。この研究では子ども時代の両親の養育態度は現在の親子関係や自尊感情、生き方志向に関連があることを明らかにしている。

以上の研究は、親の養育態度が大学生以下の子どもに及ぼす影響を考察したものである。本稿では、親の養育態度や愛着に関する研究の中でも、とりわけ子に自分の価値観を押し付けたり、偏った考えで子をコントロールしたりする親を「毒親」と分類する。一般に毒親に育てられたと感じる子側から自分の親の特性をみるベクトルで論じられることが多い。本研究では親の養育態度の中でも、どのような要因が毒になり成人後も影響を受けるのかを抽出していくことが肝心であると考えている。親の養育態度による子どもの人生への影響は、社会人として勤めるようになったとしても当然影響を受ける。しかし、それが具体的にどのような影響を受けるのかについての研究は少ない。それはとりもなおさず、人間の発達段階はエリクソン（1959）の提唱する心理社会的発達理論に示されるとおり、人はそれぞれの発達段階において他者との相互作用など多様な要因（変数）の影響を受けて発達するものであり、親の養育態度のみに影響が限定されることはないからである。よって、成人後において、親の養育態度、とりわけ毒親が社会人生活に及ぼす影響などそもそも正確に測れるものではない。一方で、近年の社会人のメンタルヘルス不調増加の背景には、社会人の現在の状況や仕事に関する多様な要因等はいうまでもなく、幼少期から成人に至る過程における親の養育態度の影響を受けた本人の特性も大きい（それらの社会人に対する現場における対応については岡崎・金森（2021）を参照されたい）。

そのため、社会人である現在の状況と親の養育態度との間にある関連を明らかにすることが本研究の目指すところである。

そこで、「幼少期から中学校卒業までの期間における親（親代わりの方を含む）の養育態度」をある程度包括的に捉えるため、全国の20歳から65歳までの男女で現在雇用されている社会人を対象として調査することにする。親の養育態度に関しては当然回顧的研究となり、さらに、回答者の置かれている現在の状況に左右されることもあることや主観的な回答になりがちであることを予め把握した上で、サンプルをできる限り多く収集することでデータの精緻化に努めるなど研究の限界を考慮して実施する。

以上から、本研究では社会人を対象として、まず、現在の社会人生活における子の特性と親の養育態度にどのような特徴がみられるのかについて明らかにし、次に、親の養育態度を分類した上で、さらに、その分類された親の養育態度と現在の子の特性との関係性を明らかにすることを通して、親の養育態度が子の社会人生活にどのように影響するのかを分析して明らかにすることを目的とする。

Ⅲ　研究方法

（1）調査対象

本調査は2022年２月10日から２月14日までの５日間、株式会社マクロミルに委託して11の大設問からなる「仕事に関するアンケート」として WEB アンケートを実施した。対象者は委託会社の登録モニターのうち全国の20歳から65歳までの男女で、雇用されている社会人を対象とする。そして、性別（２区分）、年代４区分（20歳代、30歳代、40歳代、50歳代以上の４区分）、学歴２区分（高校卒業と大学卒業）、雇用形態２区分（正規雇用・非正規雇用）を組み合わせた計32区分（セル）を設定した。各セルには57名ずつ（N=32×57=1824）を均等に割り付け、男性912名、女性912名の合計1824名から有効回答を得た。

本調査は、名古屋大学総合保健体育科学センター研究倫理委員会において承認を得て実施した（令和４年１月17日承認、承認番号21-08）。調査実施に当たり、まず、事前スクリーニングを実施し、その段階で調査目的と意義を示した上で、「倫理的配慮と自由意思での参加について」として自由意思に基づいて参加して頂くこと等を確認して、参加に同意していただいた方のみ Web 調査票へ回答が可能になるしくみとした。同時に、「アンケート参加に伴うリスク」として心身に負担を感じる場合には回答を途中で中止して頂くよう注意喚起を行った。次に、事前スクリーニングで上記の点をクリアしたモニターに対して本調査の依頼メールを送付し、本調査に入る段階で、①本研究の目的、意義、予測される危険、②一度同意してもいつでも同意を取り消すことができること、③メンタルヘルスや家族のことを尋ねる項目が含まれていることからメンタルヘルス不調がある方や家族のことを考えると辛くなる可能性のある方は参加を控えて頂く旨の注意喚起を含めた７項目の同意項目を示した。そして、すべての項目に同意を得た場合のみアンケートへの回答が可能になるよう再度同意を取って実施した。

（2）調査データ

本稿で使用した質問項目は、問９「幼少期から中学校卒業までの間あなたの親（親代わりの方を含む）の態度や行動について」、問10「現在のあなた自身について」の２問（各15問）である。さらに、性別、年齢区分、雇用形態、未既婚、子の有無、学歴、個人年収の属性データを使用する。問９及び問10の詳細については「Ⅳ分析」において解説するため、ここでは属性について述べる。「性別」は男性＝０、女性＝１とコード化した（コード０が基準、以下同様）。「年齢」は20歳代、30歳代、40歳代、50歳代以上の４分類（50歳代以上が基準）とした（以下、「年代４区分」という）。以下、雇用形態は正規＝０、非正規＝１、未既婚は未婚＝０、既婚＝１、子の有無は子なし＝０、子あり＝１、学歴は大卒＝０、高卒＝１とコード化した。「個人年収」は昇順に６区分（①200万未満、②200～400万未満、③400～600万未満、④600～800万未満、⑤800～1000万未満、⑥1000万以上）に分類（以下、「個人年収６区分」という）した。

なお、問９及び問10について、まず、本調査では回答時の順序効果を除去するために出題順をランダムに割り当て、次に、いい加減な回答を除去するためにそれぞれ３問ずつ（問９ではQ9-05、Q9-12、Q9-13、問10ではQ10-5、Q10-7、Q10-14）逆転項目を含めた。具体的な逆転項目は、「Q9-05r 親は私の気持ちよりも世間体や見栄を優先した」「Q9-12r 親に過度に干渉されることがあった」「Q9-13r 親に暴言を吐かれることがあった」「Q10-05r 自分に対して対応が悪い人には抗議する方である」「Q10-07r 生き辛いと思うことがある」「Q10-14r 思い通りにならないといらいらする方である」である。

データ分析の際は、それぞれ反転させた言葉に置き換えて用いた。問９では、「Q9-05 親は私の気持ちより世間体や見栄を優先することはなかった」「Q9-12 親に過度に干渉されることはなかった」「Q9-13 親に暴言を吐かれることはなかった」、問10では、「Q10-05 自分に対して対応が悪い人には抗議しない」「Q10-07 生き辛いと思うことはない」「Q10-14 思い通りにならなくてもいらいらすることはない」とした。これに伴い６項目については質問の反転に対応する回答得点に置き換えて分析した。

（3）分析目的と方法

まず、現在の社会人生活における子の特性と親の養育態度にどのような特徴がみられるのかについて明らかにする目的で、ロジスティック回帰分析を行う。次に、親の養育態度を分類するため因子分析を行う。さらに、因子分析後の下位尺度得点を用いて、親の養育態度を４つにグループ化して現在の子の特性との関係性を明らかにする目的でロジスティック回帰分析を行う。

なお、統計分析はSPSS Statistics 25 for Windowsを用いた。

Ⅳ　分析

（1）ロジスティック回帰分析（表１）

子の特性（各従属変数）と親の養育態度（独立変数・丸数字）との関連性を分析する目的でロジスティック回帰分析を行う。親の養育態度に網掛けのある項目（⑤⑫⑬）は、金森・蛭田（2022）の先行研究で示した一般的に「毒親」といわれる特徴を逆転項目として含めたものである。

まず、従属変数として、問10「現在のあなた自身について」の15項目（反転させた逆転項目を含む）をそれぞれ用いた。分析の際に、調査時の４件法の回答（①そう思う、②ややそう思う、③あまりそう思わない、④そう思わない）のうち、「③あまりそう思わない、④そう思わない」を「非該当＝０」、「①そう思う、②ややそう思う」を「該当＝１」の２区分に再コード化し、非該当を基準としたダミー変数とした。

次に、独立変数は、問９「幼少期から中学校卒業までの間あなたの親（親代わりの方を含む）の態度や行動について」の親の養育態度15項目（反転させた逆転項目を含む）を用いた。なお、「親」については、「両親が離婚・死別等で片親の場合はその方について、両親とも何らかの事情でいらっしゃらなかった場合は親代わりの方（祖父母や親族、施設の方等）について、両親または複数の親代わりの方がいらっしゃる場合で、その方々の態度が異なる場合はあなたをより大切にして下さった方についてご回答ください」と依頼した。調査時の４件法の回答（①そう思う、②どちらかと言えばそう思う、③どちらかと言えばそう思わない、④そう思わない）のうち、「③どちらかと言えばそう思わない、④そう思わない」を「非該当＝０」、「①そう思う、②どちらかと言えばそう思う」を「該当＝１」の２区分に再コード化し、非該当を基準としたダミー変数とした。

さらに、「属性」の各変数を制御変数として独立変数とともに用いた。属性の各変数と基準は、性別（男性を基準とした女性ダミー）：年代４区分（50歳代以上を基準とした20歳代ダミー、30歳代ダミー、40歳代ダミー）：雇用形態（正規を基準とした非正規ダミー）：未既婚（未婚を基準とした既婚ダミー）：子の有無（子なしを基準とした子ありダミー）：学歴（大卒を基準とした高卒ダミー）：個人年収（昇順６区分の順序尺度）である。

そして、従属変数毎に制御変数を含むすべての独立変数を強制投入してロジスティック回帰分析を行っ

た。各従属変数の分析について統計的有意水準は５％、１％、0.1％の３段階を設定し、算出された調整オッズ比（以下、オッズ比という）を表１に一覧で示した。

なお、独立変数投入前にすべての独立変数（制御変数を含む）間についての相関行列を作成し、独立変数間に r ＞ .80となる強い相関関係がないことを確認した。すべての従属変数について、それぞれの分析結果における回帰モデルのχ2検定の結果はP＜.001と有意であった。また、Hosmer-Lemeshow の検定結果は５つ（Q10-3；Q10-4；Q10-5；Q10-9；Q10-10）を除いて P ≧ .05であり、これらについては回帰式の適合度は許容範囲内であった。一方、Hosmer-Lemeshow の検定で P ＜ .05となった上記５項目について、すべての変数を強制投入した場合のモデル適合度が許容範囲外であったため、改めて変数減少法（尤度比）で分析を行った。その結果、強制投入モデルで得られた有意な変数を含むモデルにおいて Hosmer-Lemeshow 検定の P 値として P ≧ .05が示され、回帰式の適合度が許容範囲内に収まるモデルが得られた。すなわち、この５つの従属変数について強制投入によって得られる各回帰式は、Hosmer-Lemeshow 検定による適合度では不十分であるが、要因分析における有意な変数の抽出目的としては適合モデルと同等の結果が得られることが確認できたため、表１のデータをそのまま用いることとした。また、すべての分析において、実測値に対し予測値が±3SD を超えるような外れ値は算出されなかった。

（２）因子分析（表２）

問９「幼少期から中学校卒業までの間あなたの親（親代わりの方を含む）の態度や行動について」とした親の養育態度15項目（うち、逆転項目は反転したもの）について、集約化された潜在変数による因子構造を確認するために因子分析を行う。因子分析は、SPSS による最尤法・プロマックス回転を用い、因子数決定基準は固有値１以上とし、項目選定基準は因子負荷量0.4以上とした。その結果に対し、各因子に対して因子負荷量の大きい項目を中心に因子名を付与した。また、尺度の信頼性を検討するため、内的整合性をみる Cronbach のα係数を算出した。

（３）ロジスティック回帰分析（表３）

表１のロジスティック回帰分析によって親の養育態度は子が社会人になっても影響を及ぼすことが示された。そして、因子分析（表２）により、それは、子（社会人）の現在における認識としての「親からの愛情・支援」（以下、「愛情・支援」という）と「親からの介入・干渉」（以下、「介入・干渉」という）の2つと関係していることが示唆された。このため、子の現在の状態が、これら「愛情・支援」と「介入・干渉」に対する認識度の違いによりどのように異なるのかを明らかにする目的で、ロジスティック回帰分析を行う。

まず、因子分析の結果から得られた２つの因子について、それぞれに関係する各項目の素点の合計から平均点を算出し、第１因子及び第２因子の下位尺度得点とした。ただし、平均値算出に用いた素点は、表１との整合性を考慮し、調査時の４件法の各回答（逆転項目は反転後のもの）に対して①そう思う＝４点、②どちらかと言えばそう思う＝３点、③どちらかと言えばそう思わない＝２点、④そう思わない＝１点とした。各下位尺度得点（平均値）の範囲はどちらも最小値１点、最大値４点の範囲となった。

次に、この２つの下位尺度得点の高低を組み合わせることによって、親の養育態度を４グループ化した。すなわち、各因子について下位尺度得点を2.5点で高低に分け（2.5点ちょうどは高得点グループに含める）、それぞれを組み合わせた条件の４グループを作成した。第１因子では高得点群を「愛情・支援が強」、低得点群を「愛情・支援が弱」の条件表示とした。一方、意味的方向の違いから第２因子では高得点群を「介入・干渉が弱」とし、低得点群を「介入・干渉が強」の条件表示とした。そして、両因子間の組み合わせ条件として、［愛情・支援が強］かつ［介入・干渉が弱］を「基準群」（n=1013）、［愛情・支援が強］かつ［介入・干渉が強］を「A 群」（n=173）、［愛情・支援が弱］かつ［介入・干渉が弱］を「B 群」（n=257）、［愛情・支援が弱］かつ［介入・干渉が強］を「C 群」（n=381）という４区分を設定した。

これら４群を、表１の独立変数（親の養育態度15項目）と置き換えてロジスティック回帰分析を実施した。属性については、ほぼ表１と同様の結果を示したため表３では表示を省略した。分析指標としての Hosmer-Lemeshow の検定について、従属変数「２ 誰とでも親しくなれ、交友関係は長く続く方である」のみ P ＜ .05となり、すべての変数を強制投入した場合のモデル適合度が許容範囲外であった。そこで、改めて変数減少法（尤度比）で分析を行った結果、強制投入モデルで得られた有意な変数を含むモデルにおいて Hosmer-Lemeshow 検定の P 値として P ≧ .05が示され、回帰式の適合度が許容範囲内に収まるモデルが得られたことから、要因分析における有意な変数の抽出目的としては適合モデルと同等の結果が得られることが確認できたため、表３のデータをそのまま用いることとした。

（４）親の養育態度の分類（表４）

表４は、表３で用いた４区分について、これらの分類

を質的に再検討したものである。第１分類は表３の４区分であり、第２分類は親の養育態度として端的な言葉に置き換え、第３分類はそれらを構成概念として示したものである。なお、ここで用いた言葉は山下ら（2010）の研究を一部参照した。

Ⅴ　結果と考察

１　ロジスティック回帰分析（表１）について

（１）親の干渉の「度合い」が子どもの生き辛さ・生き易さを左右する

まず、子の「７ 生き辛いと思うことがない」について検討する。「⑬親に暴言を吐かれることはなかった（オッズ比1.684）」、「⑫親に過度に干渉されることはなかった（オッズ比1.616）」の２項目で0.1％水準の有意なオッズ比が示された。これらの項目は毒親の特徴を逆転項目にしたため日本語が否定的になってわかりづらいが、親の暴言や過干渉がないと子は生き辛くない（親の暴言や過干渉があると生き辛い）傾向にあると解釈できる。さらに、「④親はよく私を褒めてくれた（オッズ比1.484）」「⑥親には私が悩んでいる時に優しい気持ちで相談に乗ってもらった（オッズ比1.507）」の２項目も１％水準の有意なオッズ比で示された。加えて「⑤親は私の気持ちより世間体や見栄を優先することはなかった（オッズ比1.345）」も５％水準の有意なオッズ比で示された。褒めてくれる親、優しい気持ちで相談に乗ってくれる親に対しても、子は生き辛くないということが示されている。これらは、親の暴言や過干渉がない場合、また、優しい気持ちで親に接してもらい、子どもの気持ちが優先されることで自己肯定感を保ち生き辛さを感じることはない傾向にあると解釈でき、先行研究の結果とも適合し妥当な結果であるといえる。

一方で、「⑩親は私の服装や交友関係に干渉することはほとんどなかった（オッズ比0.693）」「⑪親は私が病気になった時は優しく看病してくれた（オッズ比0.633）」の２項目では逆相関（オッズ比１未満）で、１％水準の有意なオッズ比で示された。また、「③親は私に温かい優しい声で話しかけてくれることが多かった（オッズ比0.693）」も逆相関で、５％水準の有意なオッズ比で示された。これらの解釈は、例えば、服装や交友関係は干渉された方が生き易い傾向にあるとなる。

ここで、前者の妥当な項目とさほど変わらない内容でありながら、なぜ服装や交友関係では、「親の干渉がある方が生き易い傾向にあるのか」が問題となる。この点について、毒親の特徴である親の過干渉や暴言は、上述のとおり、たしかに子の生き辛さに影響している。しかし、干渉でも交友関係や服装の干渉は逆に生き易さにつながり、温かい優しい声で話しかけてくれるという寄り添いは辛さにつながるという結果となっている。これについては、干渉等では「その程度や度合い」が関係すると考えられ、親の気持ちや声掛けは場、条件、親の気分等の親の対応が関係するのではないかと考えられる。すなわち、「一定程度の干渉は子にとっては必要で生き易さにつながるが、一定程度を超えた干渉は子にとって生き辛さを強める」といえる。また、親の温かい優しい声かけも場に合わない時や親の気分次第で対応がころころと変わるなど一貫性がみられない時などは鬱陶しくなり、生き辛さを強める可能性が示唆される。このような非一貫性のみられる項目の中にこそ問題の本質があると考えられ、そうであるならば、この非一貫性の説明の同定のため、さらに分析を加えることとした。

（２）データの信憑性

それでは上記説明の前提として、本データはそもそも信頼できるデータであるのか、本データの信憑性の確認が必要となる。

まず、属性の分析から所与の客観的な解釈で統一されていることが明らかである。例えば、既婚者は未婚者と比較して「９ 恋愛や結婚等が順調に進んでいる方だと思う」は0.1％水準の有意なオッズ比7.724が示されており、既婚者は非婚者と比較すれば当然この設問では順調に進んでいるといえる。また、非正規雇用者は正規雇用者と比較して「８ 仕事に恵まれ年齢相応にキャリア構築できている」は0.1％水準の有意なオッズ比0.628とキャリア形成に負の方向性が示されている。非正規雇用者は正規雇用者と比較すれば、一般的には仕事に恵まれずキャリア構築も難しい傾向にあると言え妥当である。同様に、属性では全ての項目において違和感はなく妥当な回答であり、信憑性のあるデータが取得できており問題は見当たらない。

次に、属性以外で、本調査の別の設問で設定した「精神的不調を感じない」のデータを用いて分析したのが従属変数最下部の※である。「⑬親に暴言を吐かれることはなかった（オッズ比1.286）」、「⑫親に過度に干渉されることはなかった（オッズ比1.261）」では５％水準の有意なオッズ比で示された妥当な結果であり、全く異なる設問で確認しても違和感はなく信頼性・妥当性が確認された。

（３）「世間体や見栄より子の気持ちを優先する親」について

親の養育態度のうち、「⑤親は私の気持ちより世間体や見栄を優先することはなかった」について考察する。子の「１ 人間関係を上手に構築できる（オッズ比0.670）」

表１　親及び子の特性の関係性についてのロジスティック回帰分析

	問9・親の特性（独立変数・丸数字）　（項目毎に非該当=0、該当=1）																属性								分析指標	
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	性別	年代4区分 [50歳代以降基準]			雇用形態	未既婚	子の有無	学歴	個人年収	回帰式適合性	正判別率
問10・子の特性（従属変数）（項目毎に非該当=0、該当=1）	親は私の好んですることは自由にさせてくれた	親の考え方を押し付けることなく私を尊重してくれた	親は私に温かい優しい声で話しかけてくれることが多かった	親はよく私を褒めてくれた	*親は私の気持ちより世間体や見栄を優先することはなかった*	親には私が悩んでいる時に優しい気持ちで相談に乗ってもらった	親は厳しい時もあったが、その厳しさには深い愛情を感じることが多かった	親は私の進学先を私の意思に任せてくれた	親はどんな時も変わらない態度で私に接してくれた	親は私の服装や交友関係に干渉することはほとんどなかった	親は私が病気になった時は優しく看病してくれた	*親に過度に干渉されることはなかった*	*親に暴言を吐かれることはなかった*	親は私が抱えている問題などを理解し一緒に解決しようとしてくれた	親のおかげで経済的に支障なく生活を送ることができた	女性 [男性基準]	[1]20歳代	[2]30歳代	[3]40歳代	非正規 [正規基準]	既婚 [未婚基準]	子あり [子なし基準]	高卒 [大卒基準]	個人年収6区分 [昇順]	Hosmer-Lemeshow検定（p値）	（%）
1 人間関係を上手に構築できる	1.058	1.008	1.148	**1.761 *****	**0.670 *****	**1.426 ***	1.243	1.242	1.265	1.223	0.942	1.049	0.957	1.001	1.209	**1.388 ** **	0.986	0.878	0.818	**0.720 ***	**1.452 ** **	**1.582 ** **	**0.788 ***	1.050	0.934	67.4
2 誰とでも親しくなれ、交友関係は長く続く方である	0.937	1.290	1.099	**1.520 *****	**0.608 *****	1.295	1.047	1.191	1.159	1.214	0.959	1.062	0.858	**1.350 ***	1.205	**1.613 *****	1.154	0.888	0.762	**0.710 ** **	1.118	**1.504 ** **	0.877	**1.142 ***	0.440	66.8
3 社会人として一般常識をわきまえた振る舞いができる	**0.718 ***	1.123	1.085	1.274	0.886	0.983	**1.758 *****	**1.735 *****	0.995	**1.661 *****	**1.404 ***	0.889	0.924	1.062	**1.636 *****	**2.433 *****	**0.481 *****	**0.542 ** **	0.726	0.806	1.157	1.384	0.886	1.094	0.031	80.0
4 努力したことはそれなりに報われている	1.180	1.232	0.971	**1.500 ** **	0.877	1.262	**1.483 ** **	1.097	**1.378 ***	1.000	1.210	0.905	0.802	0.960	1.235	**1.868 *****	1.340	0.981	0.997	0.846	**1.443 ** **	**1.479 ** **	**0.778 ***	**1.216 ** **	0.022	69.1
5 *自分に対して対応が悪い人には抗議しない*	0.767	1.002	0.901	**0.695 ** **	**1.593 *****	0.842	0.775	0.947	1.133	0.887	0.954	1.200	**1.417 ** **	0.914	1.033	1.071	**0.662 ** **	0.831	1.038	1.161	0.832	0.998	0.949	**0.873 ***	0.016	64.5
6 社会的に孤立することなく多くの人と交流できている	1.012	1.291	1.162	**1.562 *****	0.873	**1.645 *****	**1.420 ** **	0.882	1.194	1.263	1.009	0.809	0.910	0.979	1.154	**1.759 *****	0.963	**0.682 ***	**0.632 ** **	**0.750 ***	**1.503 ** **	**1.410 ***	**0.805 ***	**1.134 ***	0.068	68.5
7 *生き辛いと思うことはない*	0.867	1.124	**0.693 ***	**1.484 ** **	**1.345 ***	**1.507 ** **	0.933	0.877	1.265	**0.693 ** **	**0.633 ** **	**1.616 *****	**1.684 *****	1.049	0.977	0.818	**0.634 ** **	**0.614 ** **	**0.685 ** **	0.930	1.097	1.166	0.840	1.082	0.959	65.6
8 仕事に恵まれ、年齢相応にキャリア構築できている	0.949	1.288	1.088	**1.790 *****	**0.666 *****	1.298	**1.487 ** **	1.246	0.962	1.047	0.852	1.004	0.809	1.305	0.909	**1.474 ** **	1.141	0.839	**0.710 ***	**0.628 *****	**1.481 ** **	**1.535 ** **	0.863	**1.488 *****	0.173	71.1
9 恋愛や結婚等が順調に進んでいる方だと思う	1.140	1.077	1.290	1.273	**0.677 ** **	**1.432 ***	1.140	1.208	**1.527 ** **	1.090	0.795	0.977	**0.720 ***	1.250	0.848	**1.370 ***	**3.242 *****	**1.506 ***	1.368	0.774	**7.724 *****	**1.508 ** **	0.922	1.062	0.017	75.3
10 友人に自分の心の内をなんでも話すことができる	0.919	1.313	1.006	**1.695 *****	**0.739 ***	**1.511 ** **	**1.400 ***	1.118	1.124	1.164	0.775	0.896	**0.760 ***	1.235	1.087	**1.441 ** **	**1.951 *****	1.121	0.947	**0.701 ** **	**1.469 ** **	**1.426 ***	1.043	1.088	0.017	67.9
11 自分の悩みを相談できる人がいる	1.168	1.129	1.104	**1.563 *****	**0.743 ***	**1.487 ** **	1.240	1.158	1.114	1.079	1.253	0.803	1.001	**1.652 *****	0.770	**2.348 *****	**2.089 *****	1.109	1.058	0.775	**1.754 *****	**1.369 ***	1.023	1.015	0.574	69.7
12 自分の夢に向けて頑張っている	0.989	0.853	1.280	**1.468 ** **	**0.707 ** **	**1.453 ** **	1.225	1.220	1.065	1.110	0.911	0.910	**0.641 *****	1.155	1.042	1.240	**1.456 ***	0.927	0.904	0.858	**1.409 ***	1.186	**0.764 ***	**1.151 ***	0.973	65.6
13 家族には何でも相談することができる	1.048	1.029	0.878	**1.675 *****	**0.786 ***	**2.202 *****	1.276	1.041	1.131	1.072	0.864	0.897	0.852	**2.286 *****	0.935	**1.428 ** **	**1.435 ***	1.018	1.194	0.990	**2.838 *****	1.229	1.174	1.049	0.093	70.2
14 *思い通りにならなくてもいらいらすることはない*	0.813	1.069	0.977	1.231	1.236	1.160	**0.731 ***	**0.719 ***	1.117	0.830	**0.719 ***	**1.584 *****	**1.373 ** **	1.020	0.998	0.897	**0.724*	**0.634 ** **	1.014	0.995	**0.732 ***	1.126	0.836	1.029	0.890	63.6
15 私は他人に対して親切にできる方である	1.031	0.964	1.212	**1.551 ** **	**0.657 ** **	1.014	1.082	**1.446 ** **	1.321	1.085	**1.334 ***	1.176	**0.710 ***	1.323	**1.628 *****	**1.552 ** **	0.789	**0.693 ***	0.769	1.173	1.031	**1.420 ***	**0.790 ***	1.120	0.626	74.5
※ 精神的不調を感じない	1.213	1.140	1.131	1.143	1.190	0.961	1.046	0.845	1.240	0.884	**0.740 ***	**1.261 ***	**1.286 ***	0.848	1.132	0.990	0.864	**0.700 ***	0.803	1.231	1.290	1.078	**0.747 ** **	**1.285 *****	0.346	66.0

† N=1824　***p＜.001, **p＜.01,　*p＜.05.
† 各従属変数について、表中数字は全ての独立変数（制御変数を含む）を強制投入したときの調整オッズ比（OR）を示し、太字はそのうち有意なものを示す.
† 各従属変数及び各独立変数は、非該当=0、該当=1として分析した.
† OR＞1のとき独立変数と従属変数は順相関、OR＜1のとき逆相関の関係性を示す.
† 番号にグレー網掛けのある項目（イタリック）は、本調査の際には逆転項目として否定的文言を用いたが、分析は肯定文に変更した上で選択肢を逆順にして実施したことを示す.
† ※は参考のための従属変数として配置したものである.

表２　子からみた親の養育態度に関する因子分析

		因子負荷量 Ⅰ	因子負荷量 Ⅱ
第１因子　α＝.905　親からの愛情・支援			
Q9-06	親には私が悩んでいる時に優しい気持ちで相談に乗ってもらった	**0.90**	-0.13
Q9-14	親は私が抱えている問題などを理解し一緒に解決しようとしてくれた	**0.89**	-0.13
Q9-03	親は私に温かい優しい声で話しかけてくれることが多かった	**0.81**	0.05
Q9-04	親はよく私を褒めてくれた	**0.81**	-0.11
Q9-07	親は厳しい時もあったが、その厳しさには深い愛情を感じることが多かった	**0.78**	-0.09
Q9-09	親はどんな時も変わらない態度で私に接してくれた	**0.63**	0.22
Q9-11	親は私が病気になった時は優しく看病してくれた	**0.62**	0.08
Q9-15	親のおかげで経済的に支障なく生活を送ることができた	**0.53**	0.03
第２因子　α＝.806　親からの介入・干渉			
Q9-12	親に過度に干渉されることはなかった	-0.32	**0.78**
Q9-10	親は私の服装や交友関係に干渉することはほとんどなかった	0.04	**0.62**
Q9-01	親は私の好んですることは自由にさせてくれた	0.33	**0.52**
Q9-05	親は私の気持ちよりも世間体や見栄を優先することはなかった	-0.05	**0.50**
Q9-02	親の考え方を押し付けることなく私を尊重してくれた	0.39	**0.48**
Q9-08	親は私の進学先を私の意思に任せてくれた	0.31	**0.42**
Q9-13	親に暴言を吐かれることはなかった	0.13	**0.41**
	因子間相関	**Ⅰ**	**Ⅱ**
	Ⅰ	**―**	**0.66**
	Ⅱ	**0.66**	**―**

因子抽出法:最尤法，回転法:Promax Rotation,

「２ 誰とでも親しくなれ、交友関係は長く続く方である（オッズ比0.608）」「８ 仕事に恵まれ年齢相応にキャリア構築できている（オッズ比0.666）」の３項目は、それぞれ0.1％水準の有意なオッズ比で逆相関となった。また、「９ 恋愛や結婚等が順調に進んでいる方だと思う（オッズ比0.677）」「12 自分の夢に向けて頑張っている（オッズ比0.707）」の２項目とは、それぞれ１％水準の有意なオッズ比で逆相関となった。

以上は逆相関を示しているため換言すると、子の気持ちより世間体や見栄を優先させる親の方が、子は人間関係が上手に構築でき、交友関係が続き、年齢相応にキャリア構築できる傾向にあるといえる。すなわち、「世間体や見栄」を優先するということは、例えば、「こんなことをするとみっともない」「人前ではこうでなければ」とある程度親からうるさく言われて生育した子の方が、社会人になった後うまく生きられる傾向にあるといえる。社会でうまく生きるためにはある程度他者の目を意識することを身に付けて成長することも必要であるという解釈が可能となる。

（４）まとめ

表１の結果から、たしかに「親の暴言や過干渉」があると生き辛い傾向にあり、毒親要件に該当する特徴が顕著に見られた。しかし、例えば、親の「干渉」についてみると、「交友関係や服装の干渉」では「生き辛さ」と逆相関となり、むしろ生き易さにつながる結果となったように、ある程度の干渉は社会で生きていく上での生き易さにつながるが、度を超えた「過干渉」となると、逆に生き辛くなることが示唆された。このように、干渉や、またそれが優しい声かけであっても、「一定の限度を超えた親の言動」は子にとって望ましくない作用を引き起こすことが示唆された。毒親とそうでない親とは「表裏一体」の関係にあるといえる。

２　因子分析（表２）について

因子分析の結果、親の養育態度ついて２因子が抽出され、第１因子は「親からの愛情・支援」、（８項目・下位尺度得点が高いほど強い）と命名された。第２因子は「親からの介入・干渉」（７項目・下位尺度得点が高いほど弱い）と命名された。第１因子の「親からの愛情・支援」は（子が認識する）親から子への愛情を示し、支援する基本姿勢の強さを表しており、第２因子の「親からの介入・干渉」は（子が認識する）親からの介入・干渉の度合いを表すものである。

Cronbach の α 係数は、第１因子 α ＝ .905、第２因子 α ＝ .806であった。一般的に0.7程度であれば内的整合性が高い（小田、2013）とされており、妥当な値が得られた。

３　ロジスティック回帰分析（表３）及び親の養育態度の分類（表４）について

まず、表３では、オッズ比を比較すると大部分の項目

表３　社会人となった子の認識としての親の養育態度分類による現在の子の生活態度についてのロジスティック回帰分析

	問10・子の特性（従属変数） （項目毎に非該当=0、該当=1；並びは該当率順）	「親からの愛情・支援（強弱）」と「親からの介入・干渉（強弱）」を組み合わせた４区分（独立変数） 基準群（オッズ比=1）： ［愛情・支援が強］かつ［介入・干渉が弱］（n=1013）			分析指標	
		A群	B群	C群	回帰式適合性	正判別率
		［愛情・支援が強］ かつ ［介入・干渉が強］ （n=173）	［愛情・支援が弱］ かつ ［介入・干渉が弱］ （n=257）	［愛情・支援が弱］ かつ ［介入・干渉が強］ （n=381）	Hosmer-Lemeshow 検定 （p値）	（%）
1	人間関係を上手に構築できる	**0.684***	**0.334*****	**0.272*****	0.940	65.1
2	誰とでも親しくなれ、交友関係は長く続く方である	0.739	**0.361*****	**0.330*****	0.001	63.7
3	社会人として一般常識をわきまえた振る舞いができる	0.781	**0.304*****	**0.280*****	0.652	78.0
4	努力したことはそれなりに報われている	0.919	**0.371*****	**0.304*****	0.886	67.1
5	*自分に対して対応が悪い人には抗議しない*	0.857	**1.659****	**1.743*****	0.354	62.3
6	社会的に孤立することなく多くの人と交流できている	0.882	**0.320*****	**0.240*****	0.904	67.4
7	*生き辛いと思うことはない*	0.718	0.929	0.807	0.063	60.9
8	仕事に恵まれ、年齢相応にキャリア構築できている	1.074	**0.495*****	**0.361*****	0.554	69.6
9	恋愛や結婚等が順調に進んでいる方だと思う	0.864	**0.435*****	**0.355*****	0.631	74.2
10	友人に自分の心の内をなんでも話すことができる	0.820	**0.427*****	**0.357*****	0.114	64.0
11	自分の悩みを相談できる人がいる	**0.653***	**0.261*****	**0.269*****	0.795	68.8
12	自分の夢に向けて頑張っている	0.957	**0.414*****	**0.552*****	0.609	61.5
13	家族には何でも相談することができる	0.908	**0.251*****	**0.245*****	0.785	66.1
14	*思い通りにならなくてもいらいらすることはない*	0.793	1.231	**1.302***	0.215	60.3
15	私は他人に対して親切にできる方である	0.721	**0.314*****	**0.280*****	0.232	72.6
※	精神的不調を感じない	**0.656***	0.910	**0.658****	0.243	65.3

† N=1824　***p＜ .001, **p＜ .01,　*p＜ .05.
† 各従属変数について、表中数字は全ての独立変数（表1と同じ属性の変数を含む）を強制投入したときの調整オッズ比（OR）を示し、太字はそのうち有意なものを示す.
† 各従属変数は、非該当=0、該当=1として分析した.
† 従属変数番号の網掛け（質問文イタリック）は調査時には逆転項目として否定的文言を用いたが、分析時には肯定文に変更した上で選択肢を逆順にして用いた.
† ※は参考のための従属変数として配置したものである.

表４　親の養育態度の分類

N=1824

	「親からの愛情・支援（強弱）」及び「親からの介入・干渉（強弱）」の組合せ４区分			
	基準群	A群	B群	C群
第１分類 （表３による４区分）	［愛情・支援が強］ かつ ［介入・干渉が弱］ （n=1013;55.5%）	［愛情・支援が強］ かつ ［介入・干渉が強］ （n=173;9.5%）	［愛情・支援が弱］ かつ ［介入・干渉が弱］ （n=257;14.1%）	［愛情・支援が弱］ かつ ［介入・干渉が強］ （n=381;20.9%）
第２分類 （親の養育態度へ置き換え）	愛情・放任	愛情・干渉	愛情不足・放任	愛情不足・干渉
第３分類 （構成概念）	見守り	過保護	無関心	冷酷
表３オッズ比の大小関係	見守り　＞	過保護　＞	無関心　＞	冷酷

で、基準群である［愛情・支援が強］かつ［介入・干渉が弱］が最もポジティブな結果を示した。一方、［愛情・支援が弱］の「B 群」と「C 群」は、［愛情・支援が強］の「基準群」と「A 群」と比較して、総じてネガティブな結果を示した。また、「B 群」と「C 群」を比較すると、［介入・干渉が強］の「C 群」の方がよりネガティブであった（15項目中11項目）。具体的に表３の「１ 人間関係を上手に構築できる」のオッズ比を比較してみる

と、［基準群］＝1＞［A 群］＝0.684＞［B 群］＝0.334＞［C 群］＝0.272と小さくなっており、この順で上手な人間関係がより構築しにくいという結果が示された。

同様に、子の15項目の特性のうち、1（人間関係構築）に加えて、2（交友関係の継続）、3（一般常識の弁え）、6（多様な交流）、15（他者に親切）は、社会的に適応する際に求められる「他者との交流」に関する5項目となるが、これら5項目の全てでオッズ比は「基準群＞A 群＞B 群＞C 群」であった。これを表4の親の養育態度と構成概念に置換すると、「愛情・放任（見守り）＞愛情・干渉（過保護）＞愛情不足・放任（無関心）＞愛情不足・干渉（冷酷）」となる。他の過半数の項目で同様の順序であった。

以上から、親の養育態度が「見守り」の子が社会人として最もポジティブであり、「冷酷」の子は総じてネガティブな社会人生活を送る傾向にあり、親の養育態度により社会人となった子の社会人生活に影響を及ぼしていることが示唆された。社会人である現在から見た親の養育態度は、「親の愛情」が付随する干渉（過保護）であればまだ許容範囲といえるが、親の養育態度が愛情不足の放任（無関心）や干渉（冷酷）は、社会人としての生活全般をネガティブにする傾向にあった。つまり、「親の愛情のかけ方で子の人生は左右される」という示唆である。

Ⅵ　総合考察

（1）一般的な毒親条件は必ずしも的を射ていない

表1から親の養育態度に「暴言や過干渉」があれば、子は生き辛い傾向にあり、たしかに毒親要件に該当する特徴が顕著に見られた。しかし、その「干渉」について詳細に分析すると、過干渉には該当しない「交友関係や服装の干渉」では「生き辛さ」と逆相関となり、むしろ生き易さにつながる結果となった。このことから親からの一定の干渉は子の社会性獲得などにはむしろ必要であるが、一方で、一定限度を超えた過干渉は子にとって生き辛さになじむ傾向にあることが示唆された。

また、親の世間体や見栄を重視する養育態度は、子の気持ちより世間体や見栄を優先させる親の方が、子は人間関係が上手に構築でき、交友関係が続き、年齢相応にキャリア構築できる傾向にあった。すなわち、「世間体や見栄」を優先するということは、「こんなことをするとみっともない」などとある程度親からうるさく言われて生育した子の方が、社会人になった後うまく生きられる傾向にあると考えられ、ある程度他者の目を意識することを身に付けて成長することも意味があるといえる。

以上から、例えば、「子どもの気持ちよりも世間体や見栄を優先する親」「子どもを罵倒する親」など一般的に言われている毒親の条件は、たしかに多くの毒親に共通してみられる特徴である。しかし、それらがすべて毒親の条件になるわけではないことが今回の分析で明らかとなった。つまり、それらが過度であればもちろん毒親に該当するが、適度の場合は子の社会性獲得等にはむしろ不可欠なものとなる場合もあるということが示唆され、毒親か否かは「表裏一体」であるといえる。

それでは一般的に毒親の特徴とされる親の養育態度はなぜ一律的に語られてきたのであろうか。例えば、毒親は、子どもを支配しようとする親、世間体や見栄を優先する親、コントロールする親等として例示列挙され、多くがそのように理解している点の考察が必要である。この点については、金森・蛭田（2022）でも既述したとおり、毒親研究は学術論文として研究された文献がほとんど見当たらず、自分の親が毒親であったことから語られる体験談的な文献と、毒親に悩まされてきた者を臨床的に見てきた臨床現場からの文献が主流を占めている点に着目する必要がある。つまりその多くが自らの体験談などの当事者的な主観に基づく議論としてなされている点に注意が必要である。

（2）子の生育には親の愛情とその適度な匙加減が必要

子の生育過程では適度な「愛情・支援」と「介入・干渉」が不可欠であり、それは強すぎても弱すぎても子の健全な生育の障害になる。親の暴言や干渉、世間体や見栄を優先する親という特徴でも示したとおり、その全てが毒親の条件になるのではなく、一定の目盛りを境に反転することが示唆された。「薬毒同源」という言葉のとおり、「毒になる親」の「毒」はその処方される量により、また、それを受け取る側の子の特性により、さらに、その時の様々な状況によって、良薬にもなり得るし猛毒にもなり得るものである。その匙加減は、親がわが子の性格や能力を親なりに把握し、わが子に合った愛情を適度に掛けるという親の深い愛情があれば見誤ることは少ないだろう。確実に言えることは、表3の結果から導いたとおり、親の養育態度は、「親の愛情」が付随する干渉（過保護）であればまだ許容範囲といえるかもしれないが、愛情の伴わない放任（無関心）や干渉（冷酷）は、成人後も心は傷ついたままで社会人としての生活全般がネガティブになる傾向にあるといえる。このことは、Susan Forward（1989）の著書『毒になる親』の副題が、「一生苦しむ子供」と訳されている点に象徴される。親の温かい深い愛情に欠けて生育すると心が傷つけられ、その後遺症で子は結局「一生苦しむ」といっても過言ではないのである。

以上から、親は子に対して間違っても過度に執拗な

暴言や干渉を繰り返してはならない。そのためには親自身が、子に対して深い愛情と真心を傾けられるような精神的な自立や成熟を目指す必要があろう。親は子を監護養育する立場にあるが、だからと言って決して子は親の所有物でもなければ、親が自分の思いどおりにコントロールできる存在ではない。子は独立した尊い崇高な存在であることを決して忘れてはならない。

（3）仕事に影響する毒親から受けた心の傷

親の養育態度について［親からの愛情･支援］と［親からの介入･干渉］の認識度（強弱）を組み合わせた4群に分類してロジスティック回帰分析（表3）を行った結果、人間関係の構築やキャリア形成をはじめとして、ほぼすべての項目で、［愛情・支援が強］かつ［介入・干渉が弱］の群が子の社会人生活について最もポジティブであり、逆に、［愛情・支援が弱］かつ［介入・干渉が強］の群で子の社会人生活は最もネガティブであることが示唆された。

社会人として社会的適応に求められる「他者との交流」をはじめ、円滑な職業キャリア形成、他者への悩みの相談、恋愛・結婚というライフイベント、生き方などの社会的発達に影響を与える項目のほぼすべてにおいて、親の養育態度が影響していた。その大小関係を不等式で表せば、愛情・放任＞愛情・干渉＞愛情不足・放任＞愛情不足･干渉となる。親の愛情があれば干渉や放任による影響は程度により軽減される。親から愛情を多く掛けられた子はポジティブに、愛情に欠ける子は総じてネガティブな社会人生活を送ることが示唆された。

先行研究で、島（2014）は大学生を対象とした調査から、「親の養育態度が過保護であると認知しているほど不安が高く、ケアを受けたという認知が低いほど回避が高くなっていること」を明らかにしている。ここでいうケアとは親から愛情や温かさを得ていることであり、親の愛情を受けたという認知があれば不安の回避につながっている。また、山下ら（2010）は、子ども時代の両親の養育態度と現在の親子関係の関連の研究から、「現在の親子関係の良好さは親の暖かさや共感、親密さなどの愛情の程度の方がより重要」というとおり、幼少期からの親の愛情がその後の人生に影響を及ぼすことについて、本研究は社会人を対象とした調査から補強できたといえる。

Ⅶ　結語と本研究の限界

本研究は社会人を対象に、まず、現在の社会人生活における子の特性と親の養育態度にどのような特徴がみられるのかについて明らかにし、次に、親の養育態度を分類した上で、さらに、その分類された親の養育態度と現在の子の特性との関係性を明らかにすることを通して、親の養育態度が子の社会人生活にどのように影響するのかを明らかにした。

調査分析の結果、まず、親からの一定の干渉は子の社会性獲得などにはむしろ必要であるが、一方で、一定限度を超えた過干渉は子にとって生き辛さになじむ傾向にあることが示唆された。子の生育過程では、適度な「愛情・支援」と「介入・干渉」が不可欠であり、それは強すぎても弱すぎても子の健全な生育の障害になることが明らかとなった。暴言や干渉する親、世間体や見栄を優先する親は、その全てが毒親の条件になるのではなく、一定の目盛りを境に反転することが示唆された。毒親の要件に該当しても、それらが適度に行使されている限りそれは子の成長や社会性獲得には有益な要件にすらなり得ることもある。しかし、度を超えて執拗になされた時には「猛毒化する」ということである。

次に、親の養育態度について［愛情・支援］と［介入・干渉］の認識度（強弱）を組み合わせた4群に分類してロジスティック回帰分析を行った結果、ほぼすべての項目で、［愛情･支援が強］かつ［介入･干渉が弱］の群において、子は人間関係の構築やキャリア形成など多くの項目で最もポジティブであり、逆に、［愛情･支援が弱］かつ［介入･干渉が強］の群において、子は最もネガティブであることが示唆された。それは、不等式で表すと愛情・放任＞愛情・干渉＞愛情不足・放任＞愛情不足・干渉の関係にあった。それを構成概念で見れば、親の養育態度は、見守り＞過保護＞無関心＞冷酷の順で、冷酷に向かうほど子は総じてネガティブな社会人生活を送ることが示唆された。親から過度の干渉なく温かい愛情を掛けられて生育した子ほどうまく社会性を獲得していくと言えるだろう。

以上から、社会人の生活態度はその全てではないが親の養育態度に関連づけられていることが明らかとなった。親といえども完ぺきな人間はいない。どんな子も親のお陰で生まれ育つことができ、親への感謝の気持ちは忘れてはならない。しかし、親の攻撃の対象とされた子もまた多くの苦悩を抱える人生となる。子どもは独立した人格であり、いかなる時も尊重されるべき崇高な存在である。親の所有物でもなければ親にコントロールされる存在でもない。親の不適切な養育態度が原因の一つとなり、社会人となった後も生き辛さを抱えメンタルヘルス不調を発症している人たちは多数いる。中には生涯にわたって苦しむ人もいる。一旦うつ病等のメンタルヘルス不調になれば就労継続も困難になることもあり、職業キャリアの継続もうまくいかずに、本人はとてもつらい思いをする。親も子も不幸の連鎖を回避するた

めには、一定期間ごとに親の養育態度が適切になされているかを見直す機会が大切である。職場においてもこのような辛さを抱えた従業員に対して、本人が求めた場合にはキャリア形成・発展の観点からも何らかの心の支援を講じることが必要な時期に来ているのかもしれない。

雇用されている社会人に対する親の養育態度についての研究は非常に少なく、新しい研究成果を提示できたといえる。しかし、親の養育態度については測定自体困難なものであり、回顧的研究として回答者の置かれている現在の状況に左右される可能性が高い。また、回答は主観的な回答になりがちであるという限界を伴っている。より質問項目を精査し、さまざまな視点から本研究を進めていくことが今後の課題である。

［注］

(1) 岩波心理学小辞典（1979）宮城音弥．岩波書店．本稿では、この文献において「コドモに対する親の態度とそれによって形成される、おもなコドモの性格特性」として示されているサイモンズの図も一部参考にしている。

参考文献

浅野大喜・信迫悟志・森岡周（2019）障害児をもつ母親の養育態度と子どもの問題行動との関係．小児保健研究，78(4)：315-324.

Baumrind, D. (1967) Child care practices anteceding three patterns of preschool behavior. Genetic Psychology Monographs, 75:43–88.

Baumrind, D. (1971) Current patterns of parental authority. Developmental Psychology Monograph, 4:1–103.

Bowlby, J. (1969) Attachment and loss: vol1. Attachment, 2nded. Basic Books.

Bowlby, J. (1973) Attachment and loss: Vol2. Separation. Basic Books.

Bowlby, J. (1980) Attachment and loss: vol3. Loss, sadness and depression. Basic Books.

遠藤利彦（1992）内的作業モデルと愛着の世代間伝達．東京大学教育学部紀要，32：203-210.

Erikson, E. H. (1959) Identity and the life cycle. Psychological issues Vol.1, No.1. New York: International Universities Press.（エリクソン，E. H. 西平直・中島由恵訳（2011）．アイデンティティとライフサイクル．誠信書房）

金森史枝・蛭田秀一（2022）家族問題による職業生活への影響：俗にいう「毒になる親」と生き辛さ．総合保健体育科学，45(1)：23-36.

片田珠美（2019）子どもを攻撃せずにはいられない親．PHP新書.

河合隼雄（1980）家族関係を考える．講談社現代新書.

中道圭人（2013）父親・母親の養育態度が幼児の自己制御に及ぼす影響．静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇），63：109-121.

小田利勝（2013）ウルトラビギナーのためのSPSSによる統計解析入門．プレアデス出版.

小川雅美（1994）不安神経症患者と両親の養育態度の関連．東京女子医科大学雑誌，64(5)：418-423.

岡崎敏博・金森史枝（2021）職場におけるメンタルヘルス及びハラスメントへの対応実例：上司の心得としての「定点観測と挨拶のベクトル」．IMH産業精神保健研究別冊.

酒井厚（2001）青年期の愛着関係と就学前の母子関係：内的作業モデル尺度作成の試み．性格心理学研究，9(2)：59-70.

笹川宏樹・藤田正（1992）親の養育態度と自己効力感及び自己統制感の関係．奈良教育大学教育研究所紀要，28：81-89.

島義弘（2014）親の養育態度の認知は社会的適応にどのように反映されるのか：内的作業モデルの媒介効果．発達心理学研究，25(3)：260-267.

清水新二（2005）家族問題研究からみた現代家族の意義と意味：保健機能と自分物語．家族社会学研究，16(2)：47-60.

Susan Forward (1989) Toxic Parents, Overcoming Their Hurtful Legacy and Reclaiming Your Life/ スーザン・フォワード（2001）毒になる親：一生苦しむ子供．玉置悟訳，講談社.

高橋和巳（2022）親は選べないが人生は選べる．筑摩書房.

友田明美（2016）被虐待者の脳科学研究．児童青年精神医学とその近接領域，57(5)：719-729.

友田明美（2017）子どもの脳を傷つける親たち．NHK出版.

山下芙実子・石暁玲・桂田恵美子（2010）大学生の親子関係・自尊感情・生き方志向と子ども時代の両親の養育態度との関連：過保護という養育態度の検討．臨床教育心理学研究，36：21-26.